

大城・萩道（北中城村） 宮城 廳

時 一九六九年九月二十七日

場所 字大城 公民館

氏名 現住所

中村のぶ
比嘉長孝
玉城昌一
中村正善
安里永宗



解説

大城と萩道は、路地を境界として二つの字に分れている家屋の一群で、西がわは萩道、東の方が大城になっている。

それらの人家は、舗装された観光道路に沿ってその左右に連らなり、鬱蒼としげる雑木林に被われた丘つづきが北風をよけ、ゆるく南に下るいい地勢である。丘の雑木林には、米軍の熾烈な砲火に堪えて生き抜いたと思われる大木がところどころに見られる。しかし座談会出席者の話では、終戦後、帰って来た時は、やはり一木もなく、白い岩肌をむき出していたと語った。

文化財指定の完全な城壁と城趾を残している中城城趾、それを中心とする一帯の中城公園、歴史の物語りと広瀬の佳景でもっとも知

られている観光名所であるが、それは字大城と百五十メートルそこそこの近距離である。

夕方からの座談会であったが、前の日は暴風来を告げていた陰曆八月十五夜であったが、それとは異なり、雨雲も風も治まって、中城公園の賑やかな琉球民謡の三味線に合わせた唄が、公民館の庭先で唄っているように聞こえた。

座談会をすすめていると、二十四年前の、戦争ゆえに、多くの沖縄同胞の惨苦と悲痛な姿が、なまなまと描き出されるので、暗い心に引き込まれていくのであったが、中城公園の郷土民謡の歌声は、時のたつにつれて調子が高くなっていき、操作しているテープには、戦争の悲惨と、平和時の人間の歓喜とが、相対して二重写しになる懸念も感じた。

中村のぶさんと米兵との応答は、英語であつたらしい。英語専門教育を卒えて英会話に秀れ、終戦後の建設時代には、かねての英語力を発揮され米軍に対する資材交渉に活躍されたと、同席の人たちが語った。夫君は、義勇隊の隊長となり米軍上陸と同時に、第一線で戦闘に参加した。この中村さんの中村家は、八重山の宮良殿内とともに、琉球政府によって文化財に指定され、昔の高倉がある。

大城と萩道は、両方合しても戦争当時、百戸内外だったようだが、直接戦争で失われたのは四軒だったが、占領後中村家隣接の六軒を残して、全部米軍が焼き払った。敗戦兵と住民のいくらかが、天井裏に隠れていたからだ、出席者たちが話した。

座談会が終つたのは、夜の十時に間もない時刻であつたが、帰りの道の大通りへ出たら、中城公園の方向へ走っている自動車の列が

ずつとづつづいていて、道を横ぎる隙がなかった。反対にわれわれの帰り道の片がわは、片道通行になっているような感じがして、一台の車も見られない。爪先下りのゆるい坂を歩くほかなかつたが、中城公園へ向かってゆく自動車は自家用車の列に、まれにタクシーもまじって、一晩中それがつづくだろうと思われた。

中秋の名月前後の中城公園は、いつの間にか観月の名所になって賑うと、つい先き頃聞いたが、ききしにまさることが自動車の列に見た。

五時間ちかく、二十四年前の戦争の悲劇にまざまざと引き入れられていたわたくしたちは、一草一木もなく白い土肌をむき出し、人影一つなく荒廃した終戦時と、夜を徹して中城公園で群衆が観月する平和な今日とを思いくらべ、時の流れにしたがって変る人生を考えざるを得なかつた。

中村正善（四十七歳） 字の供出係

供出係りとして、きついことはありませんでした。こちらは、わたくしの家内と子供たちが疎開した昭和十九年の八月十日日であつたか、その翌日に、石部隊が支那から直接やってきて、各大きな家、すべてに分担して入った。うちは隣りで、電話なども置いて、馬も四頭、隊長の馬をうちの門につないで置いて、馬当番もずつとおつて、十二時頃になると、ずつとあつちの病院のところへ大きな飲み屋がありましたが、その二階で女を連れて遊んで、そこへ隊長も飲みに行っていました。

わたくしは、長女は学校へ行つて、母親と二人だけ家にいました。まあ、いろいろありますが、四月一日、敵が上陸しましたね。その朝、友軍の自動車が燃えたんですよ。戦争は勝つというのをいっているんだから、これは大変と思つてですね、我喜屋というのがおるんですよ、そうして二人で消しに行つたわけですね。空からは飛行機が飛ばし、なかなか水は取れんし、もう消されんですよ。ほつておけつてということで、自分の壕へ行くことにしたんです。

自分の壕は、安谷屋の今コンクリート造りの教会のうしろの山の曲りかどに、そこにあつたんです。我喜屋というものは前になって歩いていんですがねえ。ちようど坂の十字路になったところに来た時、爆弾が落ちたんです。わたくしは、爆風で、パンツもやられてしまったわけです。で怪我はないもんだから、行って少し休みました。十二時頃（正午）になっていたかな、飯は食、べなかつた。するとアメリカの音が聞こえるんです。英語は知らないが、ハワイに六か年いて、声はわかるんです。覗いて見たら、アメリカが来ていますね。わたくしは、皆にも逃げなさいといつて、わしは逃げたんです。鉄砲を向けてはいたが、撃たなかつたんです。しばらくすると、鉄砲で弾を射つんですよわしに向けて。はあ、これは危いと思つて、田圃の方へ駆け落ちてですね、川に入つて、川沿いに下りて、二丈くらいある滝がありますからねえ。それからゆつくり越えてですね、また川があるんです。それから、普天間に越える丘があつてダムがありますがね。わたくしは阿檀の下の川の中に、日が暮れるまで、隠れていたんです。水につかっていますよ。それから暗くなったので上にあがつて行くと、登又近辺の人が掘つた壕が

あったから、自分は、着物が爆風で破れて、ずっと水につかって濡れていたんですからねえ。その壕によごれてはいたが、そこにあった着物に着替えてですね。それから、幸地（浦添村）、棚原（西原村）を通ってですね、首里に、自分一人。その途中、同じ部落の仲宗根小の親子三名と一しよになって行ったが、母親は壕にほったらかして、着物は壕で盗んだ汚れたのを着ただけ、何も持たないですね。

それで娘が、南風原の陸軍病院ですね、そこにいると聞いていたので、仲宗根小の三人も一しよに行ったら、いるというので娘にあって、握り飯を一つづつ貰って、娘から金を五十円貰って、それだけ持って。それからまあ、その時は四月だから寒いですよ。ひとの馬小屋に行つて、吠を取って泊つてですね。とうとう東風平だつたですかな、いや、南風原村ですね。字はわからないが、そこに自分の従兄弟の連中がいた。山内といつて県庁に出ているのが、その家族が十名ぐらゐ、偶然に会つてですね。あれはわたくしより五つ上だから、いいところへ来た。荷物を持つものがいなくて困っていたが、といつて一しよになってですね、その従兄弟たちは、わたくしたちの壕のある安谷屋ですよ。そこから下つて来ているんですから、食糧を担いで、今日はこの壕、あしたはまだどこかの壕とさかしてですね、兼城村の波平、武富・波平といつてありますかね。屋号が比嘉門という親戚がいましたので、そこをたずねて行つてですね、そこのおじさんが、部落内の壕をさがして、ここに入つていなさいというので、そこに入つていましたところ、忽ち部落のうちは全部焼けてしまいました。それからその世話になつてい

里へ行くというんですね。それでそこにもいられなくなつたんで、それから後戻り、また島尻に。南風原とか東風平とかですね。東風平の何となくところでしたか、雨はじやんじやん降るし、その時に友軍の車が米を持って来た、兵隊たちに食わすというので。加勢しなさい、加勢しないと打ち首だというんですね、雨がじやんじやん降る時に。手間賃といつて、米を一升ぐらゐ分けて、くれました。

壕は、雨が降つてくずれるので、それからまたまた糸満に。糸満に行つて、何といふかな、大里といふ部落へ。そこに行つて、大きな瓦葺の家があつて、そこはアシャゲ、ここは母家、馬小屋にも皆入っている。わたしたちはアシャゲ、十何人ですがね、そこで二、三日はいたがね。ちやうど、朝ですね、門に爆弾が落ちたんです。わたしは入口に横に長くなって寝ていたがですね。そこで、あおり、いとこたち五名死にました。向うの厩にいる米須という人は、こつち（膝上を手で示す）から切れてね、もう誰も助ける人もいない、即死ではなかつたんですが。それで従妹の子ですが、見苦しかったですな（見るに堪えなかつたの意）あのノンドンチ（屋号）のかま子よ（同席の人たちに視線を送つて、この事実を証明する気持で言つて、つづいて右足を前にのばしてつきたし、膝小僧を両手でおさえた）。

この足ですな。体は少し前のめりに左側に倒れているのに、それがまっすぐのばしたままですよ。逆に、反対にですね、体にのつかつてこんなになっていました。足先が頭のうしろにあつたんですよ。どうしてですか、わからないが、足がですよ、逆に倒

比嘉門の大きい豚が、半焼けになつていたのですね、それを食べて、それから二、三日したら、はじめいたところから、一里ぐらゐありますが、そこへ半掘りに行くんです。ところが、むこうは戦さでない、食物も糞沢です。

それから、波平の、大へん金持ちといつたですがね、その壕に入れて貰つたんです。薪も割つて、壕に入れて、夕食を食べている時ですね、その二男というのが防衛隊から来たんです。大変乱暴な青年で、なぜお前たちは、薪を割るかといつて、包丁を耳のそばにつきつけて、殺すというんです。安谷屋の従兄弟も耳の上に疵を受けて、そこを追い出されました。それは、もう真暗い夜でした。

それから、部落のはずれに、その時の村長さんの家がありました、その近くの崖陰に夜を明かしたんです。翌日は、もつと部落はずれの、岩の陰をさがして行きましたがね。ひとりの従兄弟が、どうだ、あの乱暴な青年の奴、友軍の兵隊をつれて来て、殺させてやるうではないかといつたが、いや、そんなことはせん方がいいで、といつて、那覇へ戻つて来たんです。那覇は、壺屋の元は嘉数さんの別荘といつていたが、今の何橋といつたですか。そこは沢山墓があつたんですが、その墓は、全部友軍の兵隊があけて、畳も敷いてあつたんです。そこに二十日ぐらゐおつたですかね。四月二十九日は天長節だから、その日を限つて戦争は有利になると、時どき夜兵隊が廻つて来ていっていました。そこで、消防隊が捨ててあつた古い服があつたんです。それを兵隊さんが持つて来て、着せてくれたんです。

その、二十日ぐらゐいた時に、米兵が波之上から上陸して、すぐ首を切つて行きました。即死ですねえ。三ツになる子供が、おかあさん（かま子）、おかあさんと、すがりついていましたよ。しかたがないからほつたらかして、新垣の方へ行つたわけです。そこでは、母屋にいた人たちも、死んだのは皆で十人ぐらゐだったです。それからいとこの娘も、そこで足の踵を破片でやられたんです。それは負ぶつて行きました。

新垣の部落についた時ですね、朝起きて見ると、あちこちで、「あきさみよー」と叫ぶんですね。行つて見ると、もうやられて皆死んでいるんですね。そこから、新垣の部落から、踵をやられてウジが出ている娘も負ぶつて、まだ生きているからそのまま負ぶつてですね、真栄平へ、それからもう入るところもないんですよ。壕もない。なんにもない。山に、そこにいっばいしている。それで山のところの小さい岩かげがあつたですがね、そこに松の葉を敷いてですね、そこに（従妹の屋号と、かめ子という名を同席の人たちにいふ）女のいとこがおりますが、子供と三名はここに。別のいとこは小さい岩陰があるが、離れたところに。それから、もうそこに長くはいられない、十日以上かな。もう朝は半掘りにだ、いとこ同志。半はない、キビ、キビ、キビはあつた。で何日だったか、六月の十日かな、朝二人早く起きて、キビ刈りに行つたら、あのトンボ小ですね、あれが飛ぶんですよ。それからいっばんは友軍が撃ちそこねてですね、あれが逃げてですね、それからあんまり飛ぶもんだから（アメリカの飛行機が多数来た意）生命が大切だ、さあさあかめ子家にもう来たらあなた、どんどん撃つんだ弾を。撃たれて、わたし一人が下敷きになつた。あれらはもう皆死んでしまった。いと

私たちは小さい岩陰にいたからよ。わたしひとり十名の下敷きになつて、まるで押しつぶすようにおさえつけられて、赤嶺小(屋号)のお母さんたち二人もそこで死んだんだよ。(同席の人たちへ向つていう)それから、足に疵していた娘もそこで弾に当たって死んだ。その前のことであるが、いとこ兄の妻とその長男で三人、松の根もとに寝ていたら、弾が松の幹を貫通して、それがそのいとこ兄の妻の背中に当たった。貫通したのではなかったようであつた(冒管の意)。

爆弾の落ちた大里までは、皆で十三人いっしょであつたが、あの時に四人死んで子供まで五人いなくなつた。真栄平の後の山で、残りは皆やられた。足の踵に疵していた娘も弾に当たってそこで死んだ。松の木を貫通した弾に当たりたいとこ兄の妻と子供もそこで死んだ。皆おらん、女のいとこ一人だけ残して。逃げるのは、また女のいとこ二人。それからずつともう、あつち行つたり、こつち行つたり、弾が降るのだから。とうとう摩文仁まぶんじんについたですな、摩文仁に。摩文仁のどこですか。そこは水汲みには一町くらいあるといつたかな。そこに行つて、その行かん手前にすね、人の墓の庭に行つたわけですね。そこ行つたらまた人がいっばい入っている。友軍が三名来てすね、そこに入つておつたのは、西原村の柵原の安座間という家族がいっばい入つていた。そこで子供が泣いたです。まあうち殺せ、殺すほかない、そんなに泣かしたら大変だ、というんです。それからあとまたここに爆弾が落ちて、わたしはここ(頭の右より上を手でさわる)やられたんです。それからあの兵隊

いて仲伊保というところ、海のところ、仲伊保部落。そこに十日くらいいたかな。その部落では、芋をくれなかつたです。時どき売つて下さるごいっつも、畑には芋はあるが売りもしない。それから小さい雑貨店で、今もあるがそこに泊つて、ごはんの残りなんかくれおつたです。

そこから、また国頭へ行けというんです。与那原から、トラツクとも(乗つたまま)LSITに乗せてすね、あなたはいっしょでなかつたか(中村のぶさんに振り返つて訊いたので、中村さんは、いっしょでしょう、と答えた)。いや、いや、いっしょではないな。何回も船は通つているから。それから船の中で、海の中に投げ捨てるのだアメリカが、というんです。それから二見(旧久志村)についてすね、そこに一晚泊つて。それからもう安否を訪ねるのが、お婆も元気かな、娘も生きておるか。とうとう娘はあの宜野座の捕虜の学校があるんです。そこにまた看護婦としておる。いや、久志小、久志小に。行つたらおるんです。お婆あさんは金武村の福山におるというんです。わたくしは逃げてすよ、帽子も、麦藁帽の破れたのを被つてす。何にも無いから。行つたら、お婆あはそこにおるよ、といわれた。戦前政府開墾した福山というところ。そこへ行つたらあなた、避難民がいっばいおる。うちはないです。うちは友軍の兵隊が作つていた。

この戦争で一番辛かつたことは、南風原や東風平を歩いたところ、いや、新垣、真栄平です。あそこでは、いとこたちを皆亡くして、足のひっくり返つたところにすがりついていた三つの子は、どうすることもできませんしね、ほつたらかしたか、それはもうい

さん三名と逃げてすね。それから着物を替えてすよ。余所の女の着物を着て歩き通して。壕に行つたら、前の屋(屋号)のまつ子やお母さんたちもいた。そこ行つたらあなた壕といつてもすな、友軍もアメリカたちもいっばいしている。下はすぐ海で、摩文仁です(師範健児の塔の付近らしい)。上にはもうアメリカがいっばいしておるしね。それからあの、時間ごとに、何時から何時までに出なさいとマイクでいうんです。英語でもさげぶし、方言でもいうし、またいつからいつまで来ていけない、と毎日呼ぶんです。それから、何もせんというからすね、手拭持っていたから、竹切れに白旗をつくつてすね、壕の中で。それから、もう毎日呼ぶから、六月二十二日、憶えているんです。行つたらあんだ、あの、少し行つたらもうあの戦車で、人の手や足が轢殺したように落ちておるんです。それで殺さないといつたのは嘘で、やはり自分たちも轢殺されるのだなと思つて、少し歩いたら、煙草を持つて来てすね、また罐詰持つて来て、それからまた少し歩いたらすな、通訳がいるんです。煙草を出して、君は沖繩兵か、防衛隊かという。わしは防衛隊でない。それじゃね、具志頭へ行け、そこは病院です。また。患者さんはそこに行つてすね治療するんです。治療して一晩はそこに泊つて。泊つたらばあなた、もうあの金蠅ですか、あれがいっばいだからね。翌日あのう白いシャツはみんな糞だらけです。そこからまた部落のものといっしょになつて、百名へ行つたら、石嶺という家族がおるんだからそこへ行くうじやないか、といつて、それからまあ、百名へ行つた。連れられて行くわけです。わたしたちは、百名へ行つて、そこから佐敷(村)のです。歩

ませんよ。

中村のぶ(四十歳) 家事

ちようど敵が上陸して三日目の夕方です。長男が二中の二年になつていたんです。から、「おかあさん、敵は喜舎場きしゃばまで来ているよ」というんです。それで、前にいるるデマが飛んでいたし、捕虜になつては、ろくなことはないんだと信じきつていましたので、これは逃げなければならぬといつて、小さい子供等五名を連れて、二中に出ている十四歳の長男をかしらに、長女が十歳、二女が八歳、五歳の三女、二つの四男、それだけを連れて、自分もおぶつて、五つになる女の子は長男に負ぶらして、女の子二人はわたくしが手をひいて、暮れ方に出かけました。

二男は学童疎開してました。わたくしはいっしょに行くつもりでありましたが、その日熱発しまして、とうとう行けなかつたのでございましてよ。しばらくすると、あの天妃の遭難(天妃小学校の学童が乗つた疎開船、対馬丸が撃沈したこと)をきいたもんですから、海であつぶあつぶするより、陸で死んでしまつた方がいいといつて、行く気にならなかつたんでございまして。ところがまた、あけての三月に、いよいよ戦さが来るという時になつて、うちに安田という隊長がいたんです。

「うちろろしていると大変です。もう日本は駄目です。もう見込みありません。フィリップピンでも、戦闘も立てられないで、原始切り込み、切り込み作戦しかしておりません、もう逃げられた

ほうがいいですよ。」としきりにすすめるもんですから、「そうですかね安田さん」といって、それからまた、ボロの中から荷物をつかって、那覇へ行って、十日ばかり待ったが、いっこう船が入って来ないんです。しょうがないから、商社の木造船がありましたので、それを借りて、まあ疎開するつもりで、その翌日機橋に十二時から集まったんです。ところが、天気は大変いいのに、今日は天気が悪いから船は出られません。船は出ませんということになって、また翌日の十二時に集まりなさいということになって、その日は機橋からそのまま引っ返して来たんです。そして親戚の家に戻って来たら、もう、すぐその晩から来てしまっ、慶良間からドンドンやるんですよ。大変だからというんで、その晩でこのうちに引っ返して来たんです。那覇の親戚も引きつれて。うちに来て、それからうちの壕にいたんですが、上陸して三日目に、もう敵は喜舎場の上っているから、早く首里まで下りなさい、そうして首里へ行ったらまた水際作戦ですぐ滅すから首里までくだりなさい、とうちにいる兵隊から聞いたんです。それでなんの準備もしないでともかく首里まで、首里にも親戚がありますから、そこはお粗末の壕はあるから、そこで避難しましょうというので、首里までごく軽い気持ちですすね、子供を引きつれて行ったら、夜ですけれども道は、いっぱいですよ。道順は、高いところはどうしても危いですから、谷間を抜けて行こうと、今の登又というところは、そこは両方が丘になって、谷底になっているその中間が道になっているから、その谷底の通りを歩いて行ったらわけです。ところが、その艦砲というのは、西から撃てば東に落ちるのではなく、東からうったものは西には落

は首里城になっていて、そこまでは辿りついたらけれども、それから上はどうしても上れないんです、もうあまり爆弾が激しくて。しょうがないから、あちら辺の「屋取り」(本部落から離れている小部落のこと)に入っ、そこで三日間おりました。

そしてもう何しろ破片が、こうサラサラして来て、壁までもボンボンやるんですから恐くて、その古壘を被って、来たと思ったら古壘を被って、三日間いたんですが、そこもだんだん危くなつたもんですから、これはどんなことをしてでも識名までは辿りつかねばならないというんで、識名に辿りついて、夕方、それからもう古壘をあけて入ったんです。幸い知った人の墓であったので、その人たちの墓は、簡単につくられた墓だったけれども、あけて入ったら上は岩盤があつて、非常にいい墓でした。そこでまあ、そこに一か月いました。

食事は何も持たないもんですから、それから食事の心配をしなくちゃいけない、で、考えて、これは那覇に行けばお米の残りがあるかもしれないから、那覇へ行こうというんで、毎朝暗いうちに、子供たちは墓のこして、自分は余所の人たちといっしょにイイマタに出て、真和志の上間を通って、それから与儀、真和志小学校前を通って、試験場の官舎がございましたねえ、最初官舎から入って、その台所の引き出しをあちこちあけて見たんですよ。そして飛行機が来たと思った時はそこに出て、そこに小さい壕がありますからそれに入って、避難しながら、食糧をあさって、それから夕方、日が暮れてから、また識名へ上って墓に帰って来るんです。非常に子供たちは恐わがって待っているわけですよ。そしてわたしの顔見

ちないんです。どこから入って来るかしらないが、われわれの通るところの横から入って来るんです。それでどこでも同じことだあと思いながら歩いて進んで行って、それから棚原(西原村の)へ行き、棚原から首里へ出かけたけれども、どうしても進めないんです、激しくて。それでしょうがないから西原村の翁長にある村役所に行って、そこに行ったらまあ防衛隊の隊長らしい人がそこに首里から来たといっ、なんとかかんとか指図をしているんです。そして、わたたくしはそのところへ行って、首里へ行きますかといったら、「いける、いける、今わたたくしは首里から帰って来たばかりだ、いってごらん」というので、「わたたくしは、首里に行こうとこの道を九回も下りたり上ったりしたがもう首里はどうしても行けないんですよ、どこから来たんですか」といったら、「あなたがたそこら行ったらうち殺されますよ、そこは大変危険です、うち殺されます」という。「それではどこから行けばいいですか」、という、運玉森の裏からですね、ヘンサの底からといっているんです。そのヘンサの底もやっぱり谷間ですね、そこを通って行きなさい。そして南風原の与那覇・宮城に上って、そこから首里へ上って行けというわけです。でその人のいう通りまあそこを立って、そしてそのヘンサの底を通って、与那覇へ上って行って、そこでちよっと休んでいると、もうこんな艦砲の破片が自分の前に、ぶぶんぶぶんして来るんですよ。その時はじめて、足もとに破片が落ちて、どぎもを抜かれまして大変不安になりましたけれども、どうしても首里まで行かねばならないというので、子供たちをひき連れて、今、与那原から首里に上る線がありますね。あれを通して、崎山の下のすぐ上

たらぼうつとして(毎朝暗いうちに食糧をさがしに出るので小さな子供は夕方日が暮れて帰る自分の母親を見分けることができない状態)近寄らないんですよ。わたたくしはそれを見たら涙がこぼれて、しょうがなかったんですが、そういうふうに、毎日毎日この暮しをして一か月以上いたわけです。

ところが五種くらの一連のあれ(砲火)で、攻撃がとでも激しいですよ。五百キロ爆弾というんですか、あれが落ちる時には、上から落ちるのではない、地獄の底から突き破って来るように、それからその岩盤も落ちて来て、押しつぶされはしないかという不安でしたけれども、そこは比較的強かったためにわれわれは助かって、お隣りの人は五名くらいいましたが、皆やられて(生き埋めになつての意)死んでしまいました。

それからそうしているうちに晩、月の冴えたいい晩でしたが、あんまり攻撃がなかったのでもちよつと出て見たら、そこに兵隊がいるんですよ。わたたくしをちよつと見たら、奥さん、なんでそこにうろろろしていますかというんですねえ。どうしてですかという、ここはやがて戦場になりますよというんです。そうですか兵隊さん、沖繩で戦争していませんかと聞きますか、ときいたんですよ。ありますというので、どこですかといったら、玉城村の米数に大きな天然壕があつてそこは二千人でも三千人でも入るといいますね。それでそんなところもありますかねとこういうたんですけれど、沢山の腰巾着がついているし、その当時七十五歳になるうちのおじさんが、わたしたちよりもあと、壕からでて、わたしたちを追って来たらしいけれども、途中で崖を下りるためにす

べって足を折って、足を折ったら、今度は登又の人が負ぶって首里まで来たらしいんです。首里のわたしたちが避難するといつて壕まで来たらしいけれど、わたくしたちはそこへは行かないで、識名の墓にすぐ来たので、そこにはいないわけです。

その人がどうしてわかったのか、われわれがいる識名の壕までさがして来たんです。

「あなたがたのおじさんが、足を折ってそこまでは負ぶって来てくれど、もうしようがないからあなたがた受け取ってくれ」と来たわけです。

それでわたくしたちも大変困ってはいたけれども、わたくしとそれから長男、識名から一中の前を下って、山川（首里）まで行って、そのおじさんを肩にのっけさせて、よるけたりして連れて来たんですが、もう艦砲が落ちるし、今にもやられるか、やられるかと、生きた心地もしないで、識名まで、どうして来たかわからないくらい不安の状態で、連れて来たんです。で、ちようどその兵隊が、玉城村の糸数の壕はそんな壕ですよといつても、もうそれから駄目だと思つていますから、あんまり耳にも入れなかつたんです。どうせ戦場になるからちようどおしまいでしょうと思つて、ここから遁れようという気なんか起きずにいたんです。

ところがその晩に夜遅く、十二時頃になつてからおばさん、おばさんといつてその兵隊が来たんです。

「うちの輸送の車が来ているが、おばさんたち行くか」というんですね。はあ、何卒連れて行って下さいと拝んだんです。そうしたらちようど食糧積んで来た荷馬車がうちの前に来て、そして早く

乗れ乗れというんです。そしてその荷馬車にわれわれは乗つたんです。そしてその荷馬車の主は誰かといつたら、泡瀬の人で渡嘉敷という大変小さい人でしたが、どうぞよろしくと、頼みました。

それで、それからその馬車持ちは、そこを下りて、真和志の小学校の前から今の沖縄大学の前を通つて、真玉橋に下りたわけなんです。今来た道だけれど、見て分らないというんですよ、その渡嘉敷という人が。そして那覇へ向つてどんどん進んで行くわけなんです。

そうしたら、いっしょに乗つておじさんが、「おい、おい、お前は何処へ行くのか」といっただけです。「どうしてですか、玉城へ行くではありませんか」と答えましたので、「そこは那覇だよ」といわれて、「あ、あ、そうですか」といって、また引返して来て、もうそれまでは大変ですよ、どんどん弾が降つて、いまにも直撃くらいですよ。でその馬車持ちは、道がないといつて、「ちよつと待つて下さい、少し考えましよう」といってから車を止めて、煙草を吸つて、「しばらくがまんして下さい、煙道をさがして来ますから。」といつて畑に行つて、畑道はある、「いまはもうわかりましたから」といって、今度は畑道を廻つて、玉城村に行く道をさがし出して、それから本通りに出て、ちようど、夜の明ける五時頃です、すぐ玉城村のなんところですか、曲りかどに来て、艦砲が落ちたんですよ、目の前に。そうしたら、砂煙を被つて、おんぶしている子がいきもしないんですよ。うち殺されたのかねえと思つて、おろして見たんですよ。そうしたら、起きていて何でもない、無事であつた。子供たちを見ても誰も怪我をしてないわけです。そ

れから「もう夜が明けて、前に進むことができないから、その馬車を捨てて、馬はキビ畑に入れておきますから、あなたがたは適當なところをさがして、避難しておきなさい、また夕方にはつれて行くから」というわけで、われわれは、すぐそばの一軒屋に入り込んだんです。そうしたらそこにおじさんおばあさんがいられるわけ。で二、三日もごはんを食べないもんだから、子供は大変ほしがり、おかあさん、ごはん食べたいよう、食べたいようというもんですから、そのお婆さんが聞きかねてですねえ、それから小さな釜を持ってそこにだておるんですよ。「何をなさるのお婆あさん」といつたら、「幼いこれらを、ひもじくさせてなるか、さあおじやを煮てくれるんだ」といって、そのお婆あさんが、おじやを炊く準備をしておるんですよ。大変だよお婆あさん、今真昼だからすぐわかりますよ」といつたが、そのお婆あさんは、「何でもない」と危険をおかして、子供たちに、おじやを炊いてくれたんですよ。地獄に仏の思いをしたんですよ。それからその晩までそこにいて、おじいさんに、「そこをうつわに食べ物を入れておくから、ひもじい時は、取りに来なさいよ」と勇氣づけられてですね、まあ、その晩、糸数の壕に向かつたんです。

糸数の壕へ行つたら、なるほど、入口は狭い壕ですが、それが約一町くらいのトンネル道を通つて、くぐり抜けて行つたら、壕になつていて自然壕に。そして中へ入つて見ると二階もつくられていてんです。そこには軍病院もあるし、いろいろの負傷兵も沢山入つているし民間の人も入つておる、中にまたちようど壕の真中に川も流れているわけなんです。水も何も不自由ない。それでわれ

われはまあ一番最後に入つて来たもんですから、その壕のずつとずつと奥へ入つたんです。そこには司令官のお部屋だといつて、襖まで立てられて、畳も敷かれた部屋があるんです。そこがわいていもんだから、われわれ入つていいですかといつたら、ああ、入つていいですよと兵隊がいうもんですから喜んで入つたんです。そうしてしばらくたつと子供の顔が皆まっさおになつて倒れてしまつたんです。これは大変だと思つて、ひとりひとり皆壕から引きずり出したんです。壕のそこに。そして一本松の下に寝かして、つきり酸索の欠乏でしょうからと思つてそこで寝かしておいたら、ひとりひとりまあ元氣になつてですねえ、その晩は、その壕の入口にやすみました。ちようどその壕にいる時、このおじさん（同席の中村正善さん）のお嬢さんたちですね、ひめゆり部隊の看護婦さんが来ていて、負傷兵のですねえ、手当てをしておりましたが、負傷兵は皆目をやられていももの、足は大体残つているが、大抵目をやられていも連中でした、目と手と。そうして、うんうんうめきながらも移動して来るんですがねえ、ところがそのなかでも、「水下さい」、「砂糖下さい」といいますねえ、ところが水飲ましてはいけませんよという注意を受けて水も飲ましませんでしたが、どんどん死んでいきおつたんです。で、わたくしたちは、ここにいることはできないもんですから翌日は夕方になつてから壕さがしに行きました。そうしたら泉がありましたから糸数という部落のそばに。そこで壕、さがしたんですがねえ、さがしたら、うちの壕のそばに日本の兵隊がいて、その兵隊、いくさにはいかないで、そこでわたくしたちの滞在している間、一日中食べてばかりいるんです。

どこからさがして来るのかしらないが罐詰や、なんかかんか持つて来るんですよ。それで子供たちも非常に羨ましがってですねえ、見では涎をたらしているんですよ。それで、あなたがたの罐詰から少し分けて貰えませんかと言いたんですよ。おばさん何を持っていくかというから、わたし煙草を持っていくよといった。煙草持っているかというのですね、識名の前にわたくしたちを殺さに行けといった兵隊が、これを持って行きなさい、いつかは役立つことがあるからといって煙草五個くれたんですよ。この人は軍曹だったんですが、宮崎県の出身だといっていたんですよ。でその煙草を一個ずつ出して向うの牛糞と換えて、食べさせたわけなんです。それでその兵隊たちは、おばさんこの壕から出なさい、出なさいといっているんですよ。いいえわたくしは、死んでも出ませんといったんですよ。それから喧嘩になって、何で女がそんな口を利くか、今はどんな時になっているかということを知っているかといつて、剣を抜いでわたしを殺すというんですよ。そうすると子供等がわあわあ泣き出したもんですから、まあ兵隊も手を出すわけにいかないので、おばさんには負けたいといつて、どこかへ行ってしまったんですよ。七名くらいだったんですよ。

それから、そこには十四日いて、またそこにもいらなくなつて、おなじ糸数の山の中を歩いてる時に、いい壕がございましてですねえ、そこに兵隊一人おるんですよ。人を待っているから、ここにいさせてくれませんかとお願したんですよ。非常にやさしい、年配が三十七、八か四十ぐらいの方でしたが、その人は非常に言葉もやさしくてですね、留めてやり度いことは山やまですがわたくし

しっこいですから砂糖をさがして来て、飢えをしのいでいました。赤い砂糖でした。一週間はかり頑張っていました、ある晩「どおん」という大きな音がしてですね、そして同時に天井が落ちて来たんですよ。わたくしはびっくり直撃をくつたものと思つて、どこも痛くないね、痛くないねえと暗の中でも頭をこすりとりとりさわつて、どこも痛くないというもんだから、助かったわけですね、これから疎開へでたらまずまず危いんだから、暇みたくしがついておきなさいよ、動いてはいけませんよといつて岩陰にしがみついていたんですよ。

そうして翌日起きて見たら、自分たちと一間半くらい離れたところに、大へんつかい麻が落ちていんですよ。そして、夕べの爆風はこれだったんだねえと思ひ、あやうく一家全滅するところでした。それからしばらく経つて、子供が裏に行くようにあつたが帰つて来て、かあさん、かあさん、上つて来て見なよ、というんですよ。どうしたの、といつて行つて見たんですよ。そうしたら、裏に上は屋根みたくなつた岩があつて、根本はひっこいであるので、その周囲は日本軍の大砲の弾が積んであつたんですよ。その弾に艦砲が当つて、それもいっしょに破裂して、その麻は吹飛んでなくなつて、おまけにその跡は池になつていんですよ。昨夜はそうだったんだねえといつて、そこにもおれなくなつたんですよ。

自分たちより下の方の五、六間離れたところに、親子四、五名がやられて、びびり、びびり、いっているんですよ。子供が、肋骨の間からびびりいっていたよ、おかあさん、というもんですから、そんなもの見ないでといつてわたしは見せませんでした。それから

たちのこの部隊は今あの首里の第一線へいってしまつていつ帰つて来るかわからない。わたくしは足を捻挫したために留守番みたいなもんを仰せつかつていながら大変お気の毒ではありますが留めて上げるわけにいきませんと、こういふふうに非常に丁寧に断られました。ところがまあ忍びなかつたのか、二、三日はそこにおりなさいといふから、二、三日はそこに入つていたわけですよ。そうするうちにその兵隊が、のこのちんばをひきひき出かけて行きおるのです。なにに行くな、と思つていたら、しばらく経つてから帰つて来て、おばさんそこに比較的いい壕、保証はできないけれども、まあ安全と思うところがあるからそこでも行く気になるか、というから、いいですよ兵隊さん、恐らくほかに壕はないでしょうから少しでも安全なところがあつたら世話して下さいといつて、その兵隊さんに連れられて、行つたんですが、壕といっても壕はないものですよ。三か所はガケになりましたねえ、ガケ下に行つたわけですよ。

こちらが比較的的安全で、保証はできませんが、この山ではこれ以上はさがせませんといふことでした。はい有難うございましたといつて、おじさんはじめ子供等を引つ張つてここまで行つたんですよ。そうしたらその兵隊は忍びなかつたんでしようね、またしばらくしてから、非常に古いトタンを張つたガタガタになった雨戸を持って来て、これでも張つておけば、いくぶんでも足しになるでしょうからこれ張つておきましようねえといひましたので、有難うございまして、でここに一週間くらいいて、雨はさあさあ降るし、大きな風呂敷を持っていたのでテント代りに張つて六名の家族がその岩にくっついて一週間はかりおりました。それで食料は、長男はすば

糸数の壕の東がわに行く、ナケ山といふところがあつて、そこで偶然部落の人たちが壕にいるもんですから、おじさん、わたくしたちこうですから入れて下さい、といつたら、ああ、入つていなさい、ということになつて、そこに入つていたわけですよ。そこでまた一週間程いると、今度はまた戦車砲の音が聞こえるんですよ。子供が、もう来ていようおかあさん、来ていようよ、といつて、もうここにもいられませんかといつて、皆移りおるんですよ。われわれもここにじつとしていることができませんから皆と一しょに子供を引きつれて、今度は船越・前川(玉城村)を目ざしてですねえ、船越・前川ではない、前川を目ざしてですねえ、ところが、あちらまで着かないうちに夜が明けてしまつて、今度は空襲がひどいもんですから、一軒屋の馬小屋に隠れたんですよ。そして、あの時は、風がうんと湧いているもんですから、虱取りに一生命になつて。わたしの三男がですね、これ一人砂糖樽の上のつかつていたんですよ、その時艦砲がそこに落ちたんですよ。そうして落ちたので、どうしようかなと思つて、一番下の子供は腋にひっかかえておつて、避難するところをさがしていたんですよ。あの定三回目的艦砲がわれわれが休んでいるその小屋のてっぺんに当たつたんですよ。そうしたらてっぺんに当たつたら、ザアツと周囲に散つてしまつて、下にいるのはちよつとくらい疵があつたんですよ。それからその三男、樽の上に立つておる子供は爆風でやられてですね、人工呼吸をしても駄目になつてしまつたから、これが始末もして、もし生きのびることができれば、さがしやすいいところと思ひながら畑の中に埋めしました。もうあの時からは涙も出ないんですよ。おそかれ早かれそう

るからと考えて、今から考えたなら不思議でならないけれども、ひとつ荷物が減ったような感じがしてすね、もう考えられない気持ちでした。で、そこには危いから子供たちを余所に移さなければならぬと思つてあちこち壕をさがしていると、まあ怒つてすね、そこに入れないから出て行けというもんですから、しようがないので出たんですよ。あちこちうろろしてまたもとのところへ帰つて来ると、そこにいた人たちは、直撃を受けてまた全滅しているんですよ。手も足もこんなに出血しているんですよ。それからしようがないからずつと歩いたんだけど、山の中腹になっているから、ずつと下まで行つたら、そこに軍の壕があつたんですよ、日本軍の壕。そして中を覗いて見たらそこには弾薬が一杯入つています。弾薬は糸敷の山で危険だと知つていから、そこには入る気にならないので、今度はまた別のところの上つて行つたんですよ。そこに兵隊がつくつた壕があるんですよ、そして今立つてしまつた後のように、その毛布をさわると体温が残つていから。幸いと思つてそこに入り込んだら、その壕の入口のところに来が一俵ぐらゐあるんですよ、そこは何かで黄色になつていから。しかもそのほかのことは考えられんからそこに入り込んだんですよ、その壕の中はぬかるみですよ、奥に入つたら白があるんですよ、すねえ、わたしは奥まで入りませんでしたが、長男が奥へ行つて、この米を搗いて来ようといつて、搗いて来たので、それからまあご飯を炊いたわけです。そしてそこで二、三日暮つていから、今度はそこも非常に激しくなりましたねえ、戦争が。昼でも赤い弾のいくのがよく見えるんですよ、雨は雨で降るし、その雨の中を

それからその兵隊に引つ張られて、兵隊は三名だったのですが、雨が降つていから滑べるんですよ。わたくしたちには這い上りもできない、上りきれない崖ですから一人ひとり手を引つ張り上げられて、そうして前川の方から船越がわに移されるわけですよ。それには山を越さねばならないから、これを上るの大変でした。それで山を越えと、すぐそこに男の人が二人死んでいから、元氣そうな人たちが。どうしたかと訊いたら、今この墓の中へ出て、この兵隊たちに竹槍を持って手向かつたために殺されたんですよ。今すぐ死んだばかりでしたよ、女の人たちは泣きわめいていたけれども、船越の人といつていましたが、こんな立派な体を持っていて、あんな奴たちに捕虜などになれるかといつて、竹槍を持って出たんですよ。

それから船越の方へ行くのですが、捕虜になつては面目ないといつて、長男は、顔を友軍に向けられぬと、こんな風に(顔を示す)して歩くんですよ。わたくしもまあそんな気持ちになつて、面目ないねえ、と思ひながら歩いたんですよ。そして船越寄りのあの県道です、船越の前の県道まで下りて来たんですよ。そうして恥かしい思いをしていから、四、五分も経つたかと思つと、そのうちにあの穴からも、この穴からも、立ちどころに二千人ぐらゐも集つてしまつたんですよ。それで、わたくしただけではなかつたねえ、おかあさん捕虜になつて恥かしいねえ、そうねえと話しながら歩いたのに、もうそんなに集つてしまつたから、心強くなつてすね、いくさも何も忘れてしまつて、ほつとしてしまつて、自分たちの上から何もかも通らなくなつてしまつた。それから雨にずぶ濡

こんなに赤い火のいくのがよく見えるんですよ。薪も取りに行けなから、いろいろのものをつかつて、ようやく一食ずつ煮て食べて、そこで三男が死んで後で気が抜けて、おかあさんはもうこれ以上歩けないから、いくさが来てもしようがないからここで一しよに死のうねえ、といつて、で子供たちもいといふんですよ、そこでごはんも食へてから、それから二、三日経つてからのことですよ。破裂した弾で次男が頭に少し疵があつたので、そこに塩もありましたから塩水をつくつて、これを消毒しなければならぬと思つて消毒していると、壕のそこからアメリカの兵隊がわたしたちの顔を覗いて見ていて、カマン、カマンといふんですよ。困つたと思つて、どうしようかねえ、出ようかね、子供たちはどうなるかと思つて、なかなか出られないんですよ。それからしようがないから出て行つて見ようと、まあ出たんですよ。そうしたら、早く子供たちをつれて来いといふんですよ。いいえわたくしたちは、ご飯たべないでは、歩けないから、ご飯を炊いて食べてから出る、今は入れておけといつてもきかないんですよ。そうしてわたしは子供たちを出さないといふんですよ。兵隊に向かつて、手でこんなにして出ないといふから撃ち殺させては大変と思つて、手を引つ張つてようやくそこに出したんですよ。そうしてわたしたちは、食糧を何も持つていないから、この米を持たしてくれといつたら、そんな必要はない、行つたらご馳走もなにかも一ぱいあるから、すぐに行こうといふんですよ。わたくしは、それでも、少しは持たしてくれと言つて、入つて行つて一升くらいは取つて来ました。

れになつてはいるけれども、あのお、兵隊は宣撫班ですから、チョコレートをくれたり水を飲ましたり何んかかんかやつていからけれども、最初はなかなか誰も取りませぬよ。で、仕様がなから兵隊は自分で食べて見せて子供たちにやりおるんですよ。それからまた連れられて、大里村(おほさと)の山城といふ部落まで行つて、それから一晩泊つて、また翌日大城(おほしろ)の中を通つて、親慶原(おやひら)まで来て、そこからまた百名(ひやくな)まで連れて来られたんですよ。それまでの間何も食へるものは出ませんでしたので、幸いに分けて持つて来た米を炊いて食べたんですよ、百名に来ては食へる物はありませんでした。この調子ではこの後どうなることだらうなあと不安でした。それで畑へ行つて、非牟(取落した芋のこと)をさがして掘り上げて来て、それを食べて、それから、少しでも家に近いところに行こうと思つて、志喜屋(知念村)の方に来てすねえ、志喜屋に来てそこにしばらくいたんですよ、自分たちの親戚が知念村のクシ原(久原部落のこと)といふところに行つたんですよ、早くそのおじいさんたちまではこぎつたんですよと思つて、まあいろいろの難しい手続きをして、そこまでは行つたんですよ。でそこではじめてお半はしこたま食へるし、そこのおばあさんはやさしい人で、豆腐は一日ごしつてくれるし、そこでほんとに戦争の疲れを全部取りのぞいてしまつたわけです。そこからはわたくしたちの家が、中城のダイクスといふところが手に取るように見えるんですよ。毎日家の前を出て眺めて、何とかしてうちに帰れんもんかとばかり思つていました。わたくしのおじいさんは、どこにも行かないといふんですよ、おじいさんをそのままうちに置いて、逃げたわけ

です。首里の方に。もうおじいさんのことが気にかかっているもんです。二世を呼んで、わたしは八十あまりになる年寄を家においであるから、心配になってしょうがないから、帰してくれといったんです。そうしてMPにもいったら心やすく、はい、といって諾いてくれたんです。ところが、さて出るという段になると、何かしらんが、あちらは敗残兵がいて、危険だよ、といって連れて行かないんです。それから近い方がいいというんで、今度はまた急にクシ原から佐敷(下ウ宇)に移されて、だんだん近くなつてうちに帰れると思つているところに、今度は船にのつけられた。この船は南洋に連れて行くんだぞうだという話が伝わったので、も早や沖繩は、最期の見おさめだといひ合つて、皆がワアワア泣き出したんですよ。そうして与那原からLSTという船に乗せられて、ほんとにもう南洋の方へ南へ向つて行きおるんですね。ところがしばらく経つたら、船の軸は東がわに向つたから、はてなといつて皆は不思議がつたんです。二時間位たつたら辺野古(旧久志村)の赤山の麓にいつて止めてしまつたんです。「このアメリカ人は、あそこで手がけて殺すことができないで、とうとうこんなところへつれて来て皆餓死させて殺すつもりだね」と話しあつたんですよ。そこは松の木も生えないところで、はじめはテントも渡されなかつたんです。野っぱらにほうり出されたんです。で、翌日からテントをつくつてくれたんですけれども、しまいにテントを引き上げるから早く小屋を作れ、というんですが、もうわたくしは、非常に疲れて来ているもんですから、小屋どころじゃありません。で子供たちをつれて人から山なたをかりて山に木を切りに行つたけれど、自分がおまけにおつこ

た時も、一しよに水汲みに行つて、ひとところにいながら、破片に首を切られて即死したのも見ました。いつ死のうがいいと思うことばかり考えましたが、そうすると、熊本へ疎開している子が、自分たちの遺骨をさがすといつて苦労するだろうから、生きられるだけは生きよう、と思つたり、いろいろのことを考えました。

おじいさんは、戦争は軍人同士がするもので、敵でも、民間の人には、何もしない信じて、家から動くなといつていまして、わたくしたちが逃げようといつても、どうしてもききませんでした。いざ米軍が来て、戦争になったら、そうはいかないので、わたくしたちは、山川へ行くと話してましたのでおじいさんは、わたくしたちを追つかけて山川に来たようです。わたくしたちが、いなくなつたもんですから、また南へ下つたようであります。大里村の稲嶺(いんみね)目取真(めとま)が見た方がいますが、その後は、全然わかりません。遺骨もさがしようがありませんでした。

首里の山川から職名の壕に連れて来たおじいさんは、よもぎでお灸をしたりして疵もだんだんよくなりまして、船越(ふなこし)で、別べつになつていたおばさんも偶然に一しよになつて、久志まで行きました。が、あつちで二人とも、栄養失調とマラリアが一しよになつて亡くなりました。

職名の墓は、職名園のすぐ隣りで、掘り抜いた外見簡粗に見える墓でしたが、岩盤が堅固で、艦砲をはじめいろいろの弾が雨霰(あられ)でしたが、よく持ちこたえて、誰一人も怪我もしませんでした。あれがもし、普通の墓でありましたらわれわれも全滅していたと思いま

つてしまつてですねえ、もうこれ歯が立たんと引つ返して来て、それから少しの米からわけてくれるから、家を作つてちょうだいとそこにおじいさんに作つて貰つてそこへ入つたんです。そこにまあ半か年ぐらいいつて、それから安谷屋に収容されて、そこでまた半か年ぐらいいつて、自分の家に帰つたわけです。

辺野古からは久志(村)の二見(ふたみ)にいきました。食糧事情が酷く悪くて、お乳が出ないし、二歳の子供は、頭だけ大きく、体や手足は細く瘦せて、死ぬかと思つたんです。それで、瀬嵩(せたけ)には軍病院があつたので、わたくしは、この子供をつれて行つて、アメリカの医者につき出して、この子供を見て下さい、この子は病氣ではありませんよ、といつたんです。そうしたらこの医者は、これを飲まさない、といつてビタミンのBをくれたんですよ。そのビタミンをくれたがしまいに食物はないから、蛙を取つて来て、そのものを皮をはいで煮てやつたんですが、その子供はしまいに、それを生まのまま食べるんです。

ところが、そんなに瘦せた子ですが、病氣にもかからないで、死にもしませんでした。余所の肥つた強よそうな子供等は、死ぬんですよ。だから、死ぬ運命の子は死んで、死なない運命の人はどうあつても生きるんだなと思ひましたよ。この子はマラリアにもかからず、元気に成人しています。それで、瘦せて頭ばかり大きいその子は、誰でも、死ぬものと思つたのです。あとで、子供を見て知つていた隣村の人から、あなたがたのあの子供は、助からなかつたでしょうといわれたことがあります。

この戦争の話は、いくらやつてもつきません。あの糸数の山にい

す。あの激しい(弾の)雨敵のような、あつちでは、ほんとによく助かつたものだと思います。古墓といつても、現在もずつと墓で、中に入つていとお骨と一しよにいたわけでありす。

戦争がすんで、一か年経つてから帰つて来ますと、わたしの家は雨が降れば内も外もないといつた漏り方でありました。そうして帰つて来るまでは、すきが軒の高さになつていましてすね、石垣からもすきがいつぱい垂れていました。壁はなく柱ばかり立つて、まるで荒れ果てた古寺みたいになっているもんですから、すきをかきわけて入るには、非常に恐かつたんですよ。MPといつしよに来たんですが、それで、この家に住むことができるな、と思つていたが、ほかに住むうちはないから、皆に掃除をして貰つて、入つたんでございます。

うちは、わたくしたちが逃げてから間もなく、アメリカの隊長たちが入つていたので、すよ。終戦直後、あのお、荷物もすね、骨董品も全部綺麗に並べて、家主が来たら、返すといつていたんですよ。それで自分たちが引き上げない前に何とか家主をさがそうと八方手をつくしていらしいけれども、連絡の人が石川でひっかかつて、金網に入れられて、食糧事情がいいもんですから、二見に帰つて来ないのでわたくしたちに連絡がない。それで、兵隊は引きあげて、それから後はもう、そのままになつていたので、アメリカ兵は、道具や骨董品は、大事に保管してあつたようであります。

ここは相当残つていたらしいですが、敗残兵が天井にいるからといって、焼いたそうです。わたくしの家は、隊長さんたちが入つていたので焼かなくて残つたようです。家の隣りも、その隣りも、東

がわにも、西がわにも六軒だけうちの一角だけが残ったんです。

玉城 昌一（三十歳） 軍属 現区長

六月になっていたと思うんですが、小祿（現那覇飛行場）の飛行場のところに敵が上陸したという通知が部隊へありましたんでね、一度は壕の前に立ってです、その晩ちようど午前の二時頃だったんですがね、沖繩の人は地形がよくわかるんだから、小祿に上った敵を、船舶工兵隊としてですね、手榴弾を持って飛行場に向かって行ったんでありますが、雨はざあざあ降るし、まっくらだったんですよ。沖繩のものばかり二十名だったんですが、そのまま行ったんでは犬死だということで、しばらく考えてから、あしたの朝早く行くこうなという相談をしましてですね、壕の入口のところに、まあ坐っておったんです。すると、毎日毎日戦争で疲れ切っているの、坐ったきり、皆眠ってしまったんです。でもう眼をさましたのが、その時には、時間ははっきりしませんですけど、そうだったんですよ。戦車部隊を先頭にして、戦車砲は音でもわかるんです。でもって、向こうから来るんだから、そのままにしているわけにもいれないし、もうどうせ行ってもなんにもならん、この爆雷も捨ててしまっ、後方へさがろうと、皆、こわがって相談したんですね、それでもって部隊からはなれてしまっ、自由解散みたようになっ、そして、四、五名で糸満の方向へ進んで行きました。毎日まいにちいくさで、日もおぼえませんが、なるべく長らく生きようという気があったわけです。で糸満に下ってから、そこにも長くいるこ

とができなくて、島尻の一番先きの方、喜屋武のあたりをあるき廻って、ちようど、七月（六月の思い違いではないか）の二十八日になかったらうかと思えますけれど。でその時は近くの豚小屋に寝て、何の物音もないので、いいところへ来たな、と思っていたんですが、キリ、キリ、ゴロ、ゴロする音が聞こえたんです。それでもって、戦争はいつでも先頭部隊は戦車だからと思っ、ちよっと出て見廻したら、すぐ近くに來ているんです。あの時に、アメリカの飛行機からビラを撒いて来たんです、低空して。それには、住民には何もしないから壕から出て来なさい。あなたが困っている食糧は、ちゃんと準備してあるからと。それで、そももあるかなと思われるし、友軍の方では、捕虜になったら、一列に並べられて殺すというデマ宣伝もあったわけです。出ようかな、どうしようかな、と考えているうちに、戦車が十メートルのところまで來ているし、歩兵部隊も後方から銃をかまえているあんばいだし、ことばもわからないし、手まねでこうこうするもんですから、今から考えたら後方に下れという意味かな、と後方に下ったら、あっちからもこっちからも、蟻が出て来るようにしてですね、民間人も兵隊も、どこにそんな人がいたかなと思うくらい飛び出して来るんです。そこが最後の壕だったんです。いよいよ捕虜になって、疵ついてない人は疵ついている人を負ぶってでも、また担架持って來てあったんですよ。それで疵ついたものを運んで、小祿飛行場の近くの、後は山になったところへ行っったんです。そこで民間の人と兵隊とわけられて、わたくしはゲートルをはいていましたから、兵隊にいれられて、そこに一週間くらいいたですか。それから嘉手納へトラッ

クで連れられて行って、そこに十四、五日くらいおっただんでしようね。それからまた屋敷の方へ行っていたんですが、二世から、お前たちは、戦が終わるまではハワイへ連れて行くといわれたんです。それで船に嘉手納から乗せられたんですが、船の中の生活は、お恥かしいことで話しくいんです。こんな苦しいことはありませんでした。まる裸かで、船の底へ繩のはしが下されて、食べるものは、少しずつ一日に二度くれました。煙草が欲しい時は作業に出ると一本くれました。作業は、繩はしごから上って行って甲板を洗うのでした。昼も夜もまるはだかで、太陽は丸い煙突みたいなものがある、それから覗いて、ちよっと見えました。こうして、サイパンへ行って、それからハワイへ行きました。

ハワイから帰る時は、本土へ行くものは、着る物を交換してくれましたが、わたしたちは、ハワイに一月かいて、それからグアムに二か月、サイパンに三か月いましたが、帰りはグアムから出て、那覇へ来ました。すぐには下ろさないで、一晩泊ってから下して、インヌミ屋敷に行っ、そこに一週間くらいいて、帰りました。

わたくしが一番苦しかったことは、字に帰って來てですね、父母は戦前になくなって、まだ結婚もしていませんで一人ものでありましたが、青年団の作業に出なさい、字の作業に出なさいといわれて、作業に出ると少しづつ食べ物は貰うことができましたが、字の作業に出なさいということもきかずに、エイゼイ(A・J)行くことにしました。普天間にエイゼイという外人の会社がありました。

安里 永宗（四十一歳） 供出係、警防団長

供出係りとしては、別に苦しいことはありませんでした。

戦争が始まって、アメリカが上陸してからは、大変なことになったなと思っ、壕生活をすることにしました。壕には四十人ばかりいました、四月五日に二世に発見されました。

八日になってから二世が、そこに出ろと呼びかけました。出たら、どうせ殺されるのだし、ことに自分は警防団長でもあるし、自殺をしようと思って、妻に話したら、妻は、あなたが自殺するなら、親子三人でいっしょにした方がいい、崖を後ろに、それに背をくっつけて、死のうと、話し合いました。

二世がしきりに壕から出るように呼びかけるので、壕の中で死ぬのもそとで殺されるのもおなじだと思っ、皆と一しよに壕を出ました。そうしたら皆、泡瀬（美里村）につれられて行きました。泡瀬に連れて行かれる時は、あっちで殺す考えだと思いました。

泡瀬には三日いて、そこから大里に連れて行かれました。具志川村ですよ。大里からまた、新桃原というところがありますが、そこへも移されました。食糧は困りませんが、一家三人が、もとの街道の部落へ帰って、皆と一しよに暮らすことができました。

それで、お二人の中村さんのお話をきいて、ここへわたくしは出席すべきでなかったと考えていたわけです。

比嘉 長孝（六十歳）

僕等はどこにも動かんで委しいことはわかりませんが、ずっとこの大城に、高山の下に古い墓がありますが、そこにいたわけです。

自分の家族は三人、兄弟のうちは二人。

はじめの壕は、雨が漏ららがね、しかし谷底の方へ行こうということになって、それが下の方に壕掘って長らくおったわけです。そこは雨が降りつづけると、岩が流れる気がいるから、じゃもうここは危い、うちへ帰って、まず天井に上ってしようということになって上って来た。上って来て、その字の入口で兵隊に民間の人が切られたといって、アメリカに出あったら、すぐ手を上げよというもんだから、六つになる子供をおんぶして、二人子供をおんぶしておった。それで二人子供を下して、二人共手を上げた。しかし鉄砲持っているもんですからな、うつなら早く撃てというたんです。いや、シビリアンは撃たんといい、体をあちこちさわって、銀貨は持たないかというので持たんといいたら、お前は金は一文も持たんよだな、という、それで、「どうするか、撃つなら早く撃て」またいった。そうしたら「シビリアンは殺さない、人民は殺さない」といいます。それでは「どうするか」と言ったら、「われわれは下の方にいるから、今晩は自分の家におれ」という。それで自分の兄弟の家が近かったので、そうするつもりであったが、「すぐ下に瓦葺きの家があるからそこにいた方がいいじゃないか、いっしょに連れて行く」というから、いっしょに行つた。そこは敷物もない、被物もないが「おれ」というから、自分の妹の家から、ニクブク（沖縄だけの方言ではない。広辞苑にも出ている、ねこだ、ねこぶく、にくぶく、藁縄を編んで作る大型の籠）取って来て、そこで一晩泊つたんです。その翌日は泊（中城村）の方からコザの方へ戦車を沢山持つて来た。そうしてわたしを泊瀬につれて行くという、わたしは、殺さないよというもんだから安心していましたが、女

たちは、泡瀬の方は穴が掘りやすいから、あっちへつれて行って殺して埋める考えだなあ、といってみんな泣くのです。しょうないよ、あっちへ行ったら水も沢山あるから心配ないよといった。

註、多分泡瀬へつれられて行つたと思われるが、そのことは話さないで、話がいきなり、コザ云々になる。

それから、兵隊にコザへ行けといわれたので、コザへ行ってどうするか、といったら、「あなたがたの仕事が沢山あるよ、洗濯したり、芋を掘ったり、麦の配給したり」あの時は、麦が沢山あったがね、あの時は、麦のことは、ヒーというですね（Sheepのこと、ハワイでは、ヒーといっているのであらう）、それから「食べるものを集めるからね」といって、それで浦原に行つたんだね、たしかにあつちが浦原といっていた。あつち行つたら、三千人くらいの人間がおるんですな。三千人くらいおっても英語がわからないから、困るんですね、「あなたは英語わかるか」というから、「少しわかる」といったら、一区、二区、三区といつてあるんですがね、「三区の方にいって、みんなにあなたが言いつけて、仕事させる」というんです。それで、三区の方へ行つて、みんなにいろいろいづける仕事をしました。配給所へ行つて、食べる物を取つて来させて、みんなにくばらした。

戦争がすんだのは八月十五日であつたかな。戦争がもう止んで、ずつとコザにいて、後になって、安谷屋に移して、安谷屋には一か月でしたかな。それからまた自分の字に入つた。わたしたちは、前に、コザから逃げて、一度は安谷屋に来たこともあつた。それから、中村のぶさんもいっしょに、家の材料を軍から貰つて、仮建築に取りかかつたんです。

和仁屋（北中城村）

宮城 聰

時 一九六九年九月二十一日
場所 字和仁屋公民館

氏名	現住所
比嘉永俊	
大城永善	
比嘉善俊	
比嘉善盛	

解説

三か部落から二名ぐらいずつ出て貰って、北中城村の東の海、中城湾沿い一帯の、戦争による民衆の苦難と悲痛の記録を、可能の限り正確に捉える意図であつたが、熱田部落からは出席者がなかつた。

この三か部落の戸数は、戦前も現在もほとんど同じくらいで、概略、熱田部落が三五〇戸、和仁屋が六〇、渡口が七五で、合せて五百には足りないそうである。

座談会をしてわかつたのであるが、渡口と和仁屋が、戦争中の壕生活や捕虜になった状況がほとんど似ていて、壕も同じ場所にあつた。熱田も和仁屋とは人家が続いてはいるが、壕が和仁屋、渡口とは、場所もちがっていたようだし、人口も多い。しかも南の方に当

っているの、ほとんどの人が、南部へ逃走して、酷い目に遭遇しているのではないかと推察される。大城永善さんの話の中にも、南部の最南端、喜屋武村上里部落で、熱田の老夫夫婦といっしょになつたことが出てくる。しかし、熱田部落民の苦難や犠牲の状況はこの座談会では出てない。部落がたちまちのうちに灰になることだけは、比嘉永俊さんによって語られる。

午後六時から始まる座談会は、和仁屋部落の公民館というものであつたが、名嘉史料編集所長と私とは、共に和仁屋部落は初めてのことで、中城湾に面する平野を縦貫する十三号線で下車し、丘の方へ緩く上る道へ入つて訊ねた。その上り道の尽きるあたりに見えるブロック建ての公民館を教えて貰つた。

わたしたちの座談会は、意外に長くなつた。公民館は、婦人会の踊りの練習があるというので、会長だるうドラを鳴らした。集まりの合図は、ドラを鳴らすらしい。

わたしたちの座談会は十一時近くになつてやつと終つた。婦人会は、中秋の十五夜あたりに、盆踊りみたような催しがあるらしく、その稽古でもあろうか。

わたしたちが公民館を出ると、三叉路に材木でも積んであるようであつたが、それに十人ばかりの婦人会員が腰を下していた。わたしたちの終るのを待っていたのである。

区長さんの案内で十三号線へ出た。相当の距離があつた。十三号線は、バスはとくにない、タクシーも通る様子がない。ずいぶん待つて、やつと車が来た。幸いに空のタクシーで比嘉区長と別れ、普天間めぐりで、十二時十分前に那覇へ帰りついた。